



てん けい わく もん
『天経或問』

資料登録番号
SH-2011-01

今回ご紹介するのは、江戸時代中期の1730年に刊行された自然科学書『天経或問』です。この本はもともと中国の本で、17世紀の中国の游子六ゆうしやくが著しました。それを日本の天文家・西川正休まさやすが訓点を施して読みやすくして刊行したのが本資料です。

■一時期は流通が禁止された「幻の本」

内容は、すべて問答形式で書かれていて、前半は天文学の話題が中心で、天の体系、太陽や月、惑星の運動、月の満ち欠けや日月食などのしくみ、星座などについて説明しています。後半は、風や雨、雪、カミナリ、虹などの気象現象の説明に移り、さらには、なぜ海の水は塩辛いのに川の水は塩辛くないか、天から星が降って人になるという話は本当か、といった話題にまで及びます。



写真：『天経或問』

游子六は、ヨーロッパから伝えられた新しい科学の知識を吸収し、中国の伝統的な考えとうまく融合させてわかりやすく説明を加えているのですが、江戸初期に幕府がキリスト教に関係する書籍を禁書とした際に『天経或問』もリストに記載され、日本国内での流通が禁じられました。しかし、写本によって密かに広まっていたと言われています。そして禁書令が緩和された後の1730年になって、ようやく出版されたのです。

■『天地明察』ゆかりの本

『天経或問』てんけいやくもんといえは、日本で最初の国産暦である貞享暦じょうきやうを作成した渋川春海が入手し、研究を行なったことが知られており、この秋に映画化される『天地明察』の原作小説(沖方丁著)にも、当時禁書として扱われていた本を春海が入手したシーンが描かれています。当時の文書を見ると、春海は、『天経或問』に書かれた西洋の説の一部については有害なものであると述べているものの、暦や天文学に関する箇所は大いに参考にしたようです。

『天経或問』は、当時の人々の科学知識の水準だけでなく、江戸期の社会の様子なども知る事ができる面白い資料といえます。 嘉数 次人(科学館学芸員)